慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本博物学史覚え書 X
Sub Title	Notes on natural history in Japan （ X ）
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 No.29 (2001.) ,p.18- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20010001-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hiyoshi Review of Natural Science
Keio University No. 29, 18-40 (2001)

日本博物学史覚え書　X

磯　野　直　秀

1　渋江長伯の文化6年採薬行

白井光太郎著『日本博物学年表』(注1)の文化6年(1809)条に，以下の記事がある――「九月より十一月まで，幕府侍医，法眼兼官苑総管渋江長伯，命を奉じて甲州に薬園を創開し，駿・甲・豆・遠の諸州に採薬す。随行者，小林修・藤田仁・榊原惟徳・近藤惟昌・梅野好武・飯田景・多賀谷驥等，其採品を図録し，一巻となし，以て世に伝ふ(鴨村(おうそん)随筆及採薬図)」。

江戸時代後期における幕医の採薬行はほとんど知られていないので，この渋江長伯(注2)の件については，いま少し詳しいことを知りたかった。そこで長伯の著作を調べてみると，前記年表の『鴨村随筆』は『鴨村瑣記』，『採薬図』は『渋江長伯甲駿豆相採薬図』が正しい書名であること，この採薬行のとき長伯が草した紀行文が7件存在することが明らかになった。そして，それらの資料から，甲府に赴いたのは幕府薬園の新設ではなく，既存の薬草植付場の見分らしいことがわかり，採薬行の日程もかなり明確になった。全貌が明らかになったのではないが，いままでに判明したことを本報でまとめておきたい。

まず，用いた資料の概略を記しておく。いずれも筆写本である。紀行文には，墨絵か淡く彩色した，見事な風景画が数多く添えられている。

①『鴨村瑣記』(内閣文庫，212-232，1冊)，和文，転写本。随筆集で，博物誌記事が少なくない(注3)。

②『渋江長伯甲駿豆相採薬図』(国会図書館，特1-458，1冊)，転写本。採集した動植物の彩色図譜だが，失われた分があって，28図しかない。各図には，記録者を明記し，品名だけでなく，特徴・場所・月日などを注記する。図にある氏名は，冒頭の年表記事の7名。

③『蚕叢日記』(東博，和2410，1冊)，漢文，紀行文，自筆本。「蚕叢」は蜀の地の別称で，ここでは甲州の山々の険しさを意味する。文化6年8月28日に江戸を出立してから，9月3日に甲府に到着するまで。

④『酒折湯嶋記』，和文，紀行文，転写本。9月9日に酒折宮に参詣した折と，同12日に湯嶋

〒232-0066 横浜市南区六ッ川3-76-3-D210，慶應義塾大学名誉教授：Notes on Natural History in Japan (X), by Naohide Isono (76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan ; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Sept. 15, 2000]

●本稿では，引用文の漢字と仮名に現行字体を用い，濁点と句読点を適宜加えた。引用文中の(　)は原注，〈　〉は原本の振り仮名，【　】は脱字・送り仮名の補足，[　]は磯野による注と補足である。また，「東博」は東京国立博物館の略。

へ赴いた折の記録。国会図書館蔵『官遊紀勝』（113-134，8冊）に所収（注4）。

⑤『大泉紀』，和文，紀行文，転写本。10月3日に東光寺山（現愛宕山）を経て，甲府の大泉寺に参詣した折の文。資料④と同じく，『官遊紀勝』に所収。

⑥『御嶽遊記』（東博，和840，1冊），漢文，紀行文，自筆本。10月6日に甲府から日帰りで御嶽に遊んだ折の文。

⑦『藤水日録』（⑥に合冊），漢文，紀行文，自筆本。「藤水」は富士川の漢風名称。10月29日に甲府を出立して，富士川沿いに南下し，11月5日に駿府（静岡）に着くまで。

⑧「甘草屋敷所蔵資料」，『日本薬園史の研究』，p. 206（注5）。甲州塩山の甘草屋敷所蔵文書の引用――「文化六年十月廿四日，幕府奥御医師兼薬園総管渋江長伯法眼一行十四人，御甘草畑見分あり」。

【甲府へ行った目的】

前述のように，渋江長伯が甲府へ赴いたのは薬園を創設するためだったと，白井は記している。その根拠は，資料①『鴨村瑣記』の「経石」の項と思われる。ところが，ここには「甲州」「官苑」の語はあるものの，肝心の目的を記した個所が判読しがたく，内閣文庫本では，転写した人物も読めなかったのか，1字を空白にしているほどである。少なくとも内閣文庫本には，「創設」に相当する語は無い。また，このときの長伯の紀行文は7件も残っているのに，そのいずれにも「薬園の設置」を示唆する語や文は見付けられなかった。ほかの資料でも，文化6年に幕府が甲府に薬園を開いたとの記事を見たことがない。

一方，資料④『酒折湯嶋記』には，こう記されている――「九月十二日　甲城の廓外を見廻り，官事もすみ，古城の下に出ず。此所にも見廻りの地あればなり……」。この文からは「見廻り」が役目だったように受け取れる。また，資料⑧は明らかに見分のため甘草屋敷を訪れたことを示している。時代は享保の頃に遡るが，松井重康の『諸国採薬日記』（注6）を見ると，甲府の周辺には何カ所かの甘草植付地があったことがわかる。そのような薬草植付地が甘草屋敷以外にも残っていて，その状況調査が長伯の受けた命令ではなかったのだろうか。次に記す日程表を見ると，甲府滞在中，長伯たちは甲府の周辺をあちこちと動きまわっている。特定の場所に薬園を作るために来たのなら，これほどの自由度があるとは思えない。

【甲斐・駿河・伊豆巡回の日程】

上述の資料②～⑧の記載から，月日が明確な記事を抜き出して，表1を作成した。

江戸を出立したのは，文化6年（1809）8月28日。少なくとも7名の門下と，数名の従者が同行したはずである。甲府到着は9月3日で，それから2カ月弱のあいだ甲府に滞在し，周辺で採薬している。また，御嶽や各地の寺社へも足を運んでいる。表には記さなかったが，資料④⑤を所収した『官遊紀勝』から，岩堂観音や，韮崎の諏訪明神・雲岸禅寺にも参詣したとわかる。「忙中，閑あり」というが，少し閑がありすぎる気がしないでもない。

甲府を離れたのは10月29日，まず韮崎を訪れ，ついで富士川に沿って南行，11月5日に駿府（静岡）に到着。それから伊豆に赴き，伊豆半島の駿河湾側の付け根にある長浜（三津の近郊）に，少なくとも10日あまり滞在し，何回か磯や海に出ている。日付は特定できないが，長浜の

表1　渋江長伯の甲斐・駿河・伊豆巡回日程（文化6年，1809）

月　日	資料*	滞在地／事項**
8月28日	③	江戸を出立。府中，八王子，上原，黒岱（現黒野田？）で各1泊。
9月3日	③	甲斐国甲府着，柳街の旅館に宿泊。
9月9日	④	在甲府，酒折宮に参詣。
9月12日	④	在甲府，湯嶋へ行く。
9月16日	②	甲斐国山梨郡八幡村（現甲府市内）で採薬。
9月18日	②	甲斐国八代郡右左口村（現中道町）で採薬。
9月21日	②	甲斐国巨摩郡団子村（現双葉町）で採薬。
9月23日	②	巨摩郡長峰で採薬。
9月24日	②	山梨郡万力村（現山梨市内）で採薬。
10月3日	⑤	在甲府，信玄廟のある大泉寺に参詣。
10月6日	⑥	甲府から御嶽（甲府の北）へ行く。日帰り。
10月24日	⑧	山梨郡塩山の甘草屋敷を見分。
10月下旬	②	山梨郡石森村（現山梨市内）で採薬。
10月29日	⑦	甲府を出立，韮崎泊。
11月1日	⑦	韮崎の北方で鳳凰石などを集める。韮崎再泊。
11月2日	⑦	韮崎を出て富士川に沿って南下，鰍沢泊。
11月3日	⑦	身延を経て南部泊。
11月4日	⑦	南部を出て南下，駿河国蒲原泊。
11月5日	⑦	蒲原を出て，東海道経由で駿府着。同地泊。
11月7日	②	駿河国阿部郡建穂寺観音山（駿府の北方）で採薬。
11月15日	②	伊豆国三島白滝観音で採薬。
11月17日	②	伊豆国長浜（沼津の南，三津近郊）着。
11月18日	②	長浜から漁船で近海に出，ウツボを捕える。
11月26日	②	長浜から漁船で近海に出，カレイの幼魚を捕える。
？月？日		江戸帰着。

* 資料番号は本文参照。

**「採薬」と記したのは，資料②にスケッチが残されている場合である。

磯で採集したイソギンチャク類，アカウニ，ガンガゼ（トゲの長いウニ），カメノテ（フジツボに近縁で，亀の手のような形をしている）の図が，資料②『渋江長伯甲駿豆相採薬図』に残されている。磯では普通の動物ばかりだが，江戸住みの一行にとっては珍しかっただろう。そして，長浜を最後に，長伯たちは江戸に戻ったはずだが，残念なことに江戸帰着の月日はわからない。11月26日にはまだ長浜にいるので，帰府は12月に入ってからと思われるが……。

（注1）　白井光太郎，『[改訂増補] 日本博物学年表』，大岡山書店，1934年。

（注2）　渋江長伯は宝暦10年（1760）に太田元達の四男として誕生，のち渋江長胤の養子となる。幕府奥詰医師，名は虬，通称長伯，字潜夫，号西園・確亭・清閑堂主人。天保元年（1830）4月19日没，年71。幕府の薬園管理や物産事業などの実際面に当たる。注3参照。

（注３）　本筋とは関係が無いが，『鴨村瑣記』の「硝子の初」と題する項に興味深い記載がある――「文化六年，予上江申上て，ショメールといへる細工事を書たる書を御買上になり，阿蘭陀通詞馬場佐十郎を申立て，西洋のびいどろ吹方を和解して，西洋硝子製法書物三冊出来して，初て阿蘭陀の水晶びいどろを吹出し，品々献上もなしたり」。「ショメール」とは，仏人ショメール著『日用百科事典』の蘭訳本 “Huishoudelijk Woordenboek” で，動植物に関する項も多い。幕府天文方に設置された蛮書和解御用の事業として，その翻訳が文化８年（1811）から始まり，弘化２年（1845）頃まで続いた。その訳本『厚生新編』は江戸時代には出版されなかったものの，多数の人々が原本・訳本を利用した。そのきっかけを作ったのが渋江長伯だったのである。

（注４）『官遊紀勝』（別名，江君確亭紀行，甲府紀行）は，『峡中行』（資料③の和文版），『酒折湯嶋記』，『岩堂記』，『大泉記』，『遊御嶽記』（資料⑥の和文版），『遊韮崎記』の６書を所収する。すべて渋江長伯がこの甲州行のときに記した紀行文である。いずれも図入り，和文。幕府儒臣で漢学者の成島司直が，序を寄せている。

（注５）　上田三平著・三浦三郎編，『［改訂増補］日本薬園史の研究』，渡辺書店，1972年。

（注６）『諸国採薬日記』（国会図書館，126-121，５冊）のうち，享保８年（1723）10月16日に江戸を出立して甲府へ向った採薬行の日誌。→磯野直秀，日本博物学史覚え書（VI），慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，**24** 号，99-118，1998年。［該当するのは第３節］

2　二人の阪元慎

『加越能三州採薬記』という筆写本がある。東京大学総合図書館田中文庫の蔵書（SV-8，１冊）で，横小本。柱に「阪蔵書」と刷られた半葉20行の罫紙を使用している。阪（さか）元慎・阪優吉父子の自筆本で，次の４部から構成され，筆跡は，①②が父元慎，③④が子の優吉と思われる。

①「元治元年［1864］甲子秋九月九日，御領国薬種掘立方主附御雇被仰付，越中射水郡能州口郡廻村ス」

採薬記で，上記のように元治元年９月９日に命を受け，９月29日に自宅（金沢）を出立，越中・能登を回って，11月１日に帰宅するまでの日誌。毎日，行程と採集品を記す。採薬だけではなく，各地の農民に薬種の栽培・採集・加工法を指導していることがわかる。

奥書の署名は，「村井又兵衛手医師　阪元慎／次子　阪優吉」。

②「元治二［＝慶応元年，1865］乙丑仲春，御国産薬草掘立方并製法等為教授，能州口奥郡採薬ス」

これも採薬記で，「仲春」（２月）は命を受けた時点だろう。口奥郡は口郡・奥郡の意。出発は慶応元年３月14日，能登半島を回って，４月25日に帰宅するまでの日誌。様式・内容は①と同じ。

奥書の署名は，「村井又兵衛手医者　阪元慎／阪優吉」。

③［阪優吉の職歴］

題は無く，慶応４年（1868）５月に向山養生所教授に任命されてから，同年11月に神戸に赴

くまでの職務の変遷を列記。激動期なので，わずか半年のあいだに数度職務が変わっている。

④［阪優吉の田中芳男宛書簡］

田中芳男が加賀・能登・越中の産物を問い合わせてきたのに対する返書（二人は，以前からの知己らしい）。優吉は，その産物の資料として，上記①②の採薬行を記録した本書を田中に進呈すると述べ，それに欠けている石類の目録（約100品，産地などを付す）を書簡中に記している。末尾に「3月9日　阪優吉／田中芳男様」と記すだけで年記は無いが，田中芳男が産物の問い合わせをしたことが書簡に見えるので，博物局が全国の産物調査をした明治4～5年（1871～72）の頃であろう。

*　　*　　*

博物誌史にとって興味深いのは，④の書簡の末尾に「花譜は，祖父阪元慎之著ニ御座候」という文が見える点である。「花譜」は享和元年（1801）に成った阪元慎著・早田淑慎画『屋漏堂花譜』25巻，「祖父阪元慎」は文政4年（1821）に70歳で没した阪（坂）元慎にちがいない。そうすると，阪家は，「元慎（初代，文政4年没）――元慎（二代，上記①②の著者）――優吉」と続いたことになる（注1）。代々同じ呼び名を用いるのは通称の場合に多いので，この「元慎」も通称であろう。

従来，この二人の阪元慎は混同されてきた。たとえば，『国書人名辞典』は初代のみを挙げ，『加越能三州採薬記』もその著作に数えている。『国書総目録』も二人を区別していない。しかし，上述のように，阪元慎は父と子の二人であり，その名号や著作を別々に扱う必要がある。そこで，これまでに判明したことを，以下に整理しておく。

【初代阪元慎】

東大総合図書館蔵の阪元慎著『草木譜目録』（A00-5914，自筆本）は文化11年（1814）の序をもつので，初代の著作である。その序の末尾に「阪慎元慎，於龍吟堂書」と記され，「阪慎之印」「字元脩」の2印が捺されている。したがって，字は「元脩」，堂号が「龍吟堂」とわかる（本書には，「龍吟堂蔵書」の朱長印もある）。また，「阪慎元慎」の署名がいくつかの資料に見られるが，「阪」の後の小字の「慎」が名と思われる。

まとめると，名は慎，通称元慎，字は元脩，堂号龍吟堂。姓は「阪」と記すことが多いが，ときに「坂」も用いる。宝暦2年（1752）に生まれ，文政4年（1821）4月15日没，年70。

『草木譜目録』は，版心に「龍吟堂蔵書」と刷られている用箋に記されているが，この用箋は阪元慎の著作『名物捷径』（国会図書館，特1-424），同『本草類方』（杏雨書屋，杏6413），同『三国名物志』（国会図書館，特1-31）にも使われているので，これらは初代の著作であり，みな自筆本であろう。また，享保・元文全国産物調査の際に作られた稲新助・内山覚仲編『加賀国産物志』（元文2年成）に後に校正を加えた「阪元慎」も，この初代と思われる（注2）。

初代元慎は，『屋漏堂花譜』の自叙などから，加賀藩の国家老村井長世（屋漏堂）に仕えていたことがわかる。『屋漏堂花譜』は，この村井の命によって作成したものであった。『屋漏堂木譜』『屋漏堂禽譜』『屋漏堂虫譜』も，これと同様にして執筆されたのであろう（注3）。

【二代阪元慎】

国会図書館に，『三州山海異品』（特1-3050，1冊）という著作がある。加賀・能登・越中産動植鉱物42品の彩色図に，産地や特徴を注記したものである。これは序の末尾に「慶応紀元仲夏［元年5月］愚得斎阪尚教誌」とあり，続く凡例に「次子優ガ問ニ答ル所ヲ誌ス」，本文中に「慎是ニ順フ」「慎按スルニ」との文がある。したがって，著者は二代阪元慎であることに間違いなく，その序から名は尚教，号愚得斎と思われる（注4）。

生年については，加賀藩の「先祖由緒并一類附帳」（注5）に，「阪尚教（元慎，融然斎），明治3年69歳」とあるので，享和2年（1802）の生まれである。没年は未詳だが，二代元慎が細かく記録を取った『加越能三州採薬記』の原本を，子息優吉があっさり田中に進呈していることから推察して，この書簡がしたためられたとき二代元慎はすでに他界していたと思える。

二代元慎についてまとめると，名は尚教，通称元慎，号愚得斎・融然斎。享和2年（1802）の生まれで，没年未詳。管見に入ったかぎり，「阪」を用い，「坂」の用例には出会っていない。前述のように『加越能三州採薬記』の①②末尾の記載に「村井又兵衛医師」と記すから，初代と同じように，村井家に仕えていた。村井家は代々「又兵衛」の通称を用いたが，『国書人名辞典』によれば，天保13年（1842）以降は村井長在（ながあきら）の代である。

（注1）　元慎の字はもっと古くから代々使っていたのかもしれないが，いまはそれを探れないので，上記「祖父元慎」を仮に初代とした。

（注2）　杏雨書屋蔵『加能越三州産物書』（杏4828）に所収されている『加賀国産物志』（外題は加州産物志）に，初代元慎の逝去直後にこの本が見つかった旨を，村井長世が識語として残している。

（注3）　岩瀬本『屋漏堂花譜』（岩瀬文庫，26-106）は阪家に伝わった本だが，これに『屋漏堂木譜』1巻，『屋漏堂禽譜』3巻，『屋漏堂虫譜』3巻が含まれている。ただし，注記だけである。なお，この資料も，「龍吟堂蔵書」の用箋が使われている。『屋漏堂花譜』については，明治大学文学部の平野満教授から多くのご教示を頂いた。この場を借りて，御礼を申し上げたい。

（注4）『牧野文庫蔵書目録』に「薬草会業引　阪元慎（尚教）編，嘉永5年刊（白髭社）」との記載がある。ただし，未見。

（注5）『加越能文庫解説目録』，上巻，金沢市立図書館，1975年。

3　坂本浩然・純沢兄弟

前節で，阪元慎はじつは二人だったことを報告したが，この節もそれに類する話である。

主人公の一人は桜の絵で名高い坂本浩然（こうねん）。『国書人名辞典』には「坂本浩然・本草家・画家……［名号］名，直大・直久。字，桜宇。号，浩然・浩雪・桜香・香邨・写蘭・嘗草林処・復元・蕈渓主人・純沢・五快楼・永斎。［家系］和歌山藩医坂本純菴の長男。［経歴］……摂津高槻藩主永井氏に禄仕……」（下線は磯野）との記載がある。ところが，この引用で下線を付した

部分は，弟のことらしいのである。

疑問を抱いたのは，一枚刷『水虎十弐品之図』（国会図書館，特1-3158，刊年不明）を眺めていたときであった。その刊記に「浩雪坂本先生鑑定」「純沢先生縮図」と，2行に分けて名が記されているのに気付いて，不思議に思った。『国書人名辞典』の記載のように純沢も浩然の号としたら，なぜ1行に収めなかったのだろうか。2行に分けるということは二人の人物が関与したからではないか……。その後，『江戸現存名家一覧』（天保初年の刊行といわれる）の「物産」部では，坂本浩然と坂本純沢をはっきり別人として別項に置いていると知った（注1）。そこで，改めて，坂本浩然の著作と言われているものや，同時代の人名録などを調べたところ，名・号・印記などの組み合わせが，明らかに二分される。それを，以下にまとめておく。

【坂本浩然】

紀伊藩医坂本純菴の長男。寛政12年（1800）生まれ，嘉永6年（1853）8月26日没，年54。下記の資料に「直大，浩然，桜宇，浩雪，香邨，蕈渓，嘗艸林処，五快楼，嘗艸楼，瑞葉廬」が使われている。直大は名，桜宇は字。『国書人名辞典』は浩然を号としているが，使い方から考えると「浩然」は通称のように思える。「浩雪」「香邨」「蕈渓」「嘗艸林処」は号，「五快楼」「嘗艸楼」「瑞葉廬」は堂号であろう。本草を曽占春に，画を華島雪亭に学び，下記②で自署しているように紀伊藩医であった。

①『御薬苑草木写占稿』（東大総合図書館，A00-4603，文政12年，自筆本）：目録に「浩雪阪本浩然」，本文の注記の一つに「瑞葉廬主人浩雪」とある。「瑞葉廬」は堂号らしいが，これまで知られていない。浩然には，本書のほかにも，「写占稿」「占底稿」などの題をもつ一連の図譜自筆本があるが，その一つ『日光奥羽草木図占底稿』（同館，A00-4600，文政11年）にも「阪本浩雪」と記す。一方，『琉球奇花写真底稿』（同館，A00-4601，天保9年）と『冬虫夏草写真・洋種草木写占稿』（同館，A00-4606，文政8年）では，「坂本浩然」を使っている。姓は，阪本・坂本のいずれも用いていたことがわかる。

②『菊譜』（自筆本，天保5年自序，井上書店古典籍目録；注2）：序末尾は，「江戸　紀藩医坂本直大」。

③『菌譜』（天保6年刊）：目録末尾に「坂本浩然」。序の末尾は「書於五快楼中。紀伊　浩雪坂本浩然」で，印は「浩然之印」と「蕈渓」。

④『桜草勝花品』（東博，和1018，天保6年自序）：序の末尾に「蕈渓山人書，於嘗艸楼上」。

⑤『救荒便覧』（刊本，遠藤通編著，天保7年序刊）：坂本父子が協力しており，「前集」に「救荒名物補遺審定，坂本純菴［父］／男　浩然」，「後集」の救荒草品図説の末尾に「紀伊侍医兼本草鑑定　坂本純菴撰／男　浩然校并写真」とある。

⑥『躑躅譜』（国会図書館，た-18，天保7年自序）：著者名はどこにも無いが，用箋版心は「蕈渓蔵本」。おそらく，自筆本。

⑦『救飢食品考』（東博，和2452，成立年不明）：巻頭に「蕈渓主人著」，用箋の版心は「蕈渓蔵本」。おそらく，自筆本。

⑧「墓碑銘」（藤波剛一編，医家墓碑拓本集，国会図書館，別10-33）：「香邨阪本先生墓」およ

び「浩雪院釈浩然香邨居士」。

⑨『当世名家評判記』（天保6年序列）：名号については記載が無いが，「坂本浩然……占春の門人，雪亭の御仕込……」という経歴情報がある。「占春」は本草家曽占春，「雪亭」は画の師匠華島雪亭。

⑩『広益諸家人名録』（天保7年刊）：「浩雪／名直大，字桜宇，号嘗艸林処／青山六道辻，坂本浩然」。同時代資料で信用できる（注3）。

【坂本純沢】

紀伊藩医坂本純菴の次男，生没年未詳。著作は少ないが，下記の資料では「永斎，純沢，復元，瑞葉楼」が使われており，摂津高槻藩の侍医だったとわかる。父の「純菴」は通称らしいから，子の「純沢」も通称ではないか。また，復元は名で，永斎は号と思われる。

①『百卉存真図』（天保2年序刊）：曽占春が序を記しており，その冒頭に「坂本復元，号永斎，摂之高槻侯之侍医也……」とある。用箋の版心は「瑞葉楼蔵」。この「瑞葉楼」は、兄浩然が『御薬苑草木写占稿』の注記に用いている「瑞葉廬」（前頁①）と酷似するのが気になるが、それについて考察を進める材料が今は無い。

②『本草綱目啓蒙図譜』（井口望之編，嘉永2年刊）：巻9上冊の末尾に，「通計一百一十三図阪本純沢」とあり，「純」「沢」の2小印を添える（注4）。

③『百花図纂』（坂本純菴著，天保6年序刊）：『国書総目録』には所蔵館が記されておらず，未見であるが，故上野益三先生の覚え書カード（注5）に，「永斎坂本純沢写真」「序，紀伊侍医坂本純菴」「次子純沢ヲシテ画カキシメ……画モ彩色モ亦」とある。いずれも，原本の記載の抜粋と思われる。『百花図纂』は父純菴の著作で，32品の草花の彩色図に注記を付する。その画を描いたのが次子純沢であった。

（注1）　この人名録は表記の姓名しか挙げない。『近世人名録集成』（森銑三・中島理寿編，勉誠社，1978年）に所収。

（注2）『古典籍目録：医学・本草・自然科学・洋学』，28号，井上書店。

（注3）『広益諸家人名録』とともに，従来広く使われてきた記述は，『南紀徳川史』「画家伝」の「坂本浩然（浩雪と称す）／坂本浩然直久は坂本純庵甫道の長子なり，江戸に住す（純庵甫道は町医師にて，寛政十一年御出入被命，文政十二丑年小普請御医師に被召出，天保四巳年奥医師被仰付たり）。天保十五辰年，純庵存命中，願之上，総領を除籍す。浩然，医を業とせず，画を善す。桜香又香村，写蘭の号あり……著す所の百華図纂（一巻）は人皆賞賛す……」である。本書には藩資料に基くらしい独自の記事があるが，首を傾げる個所も多い。「医を業とせず」は誤りだし，父の著作『百花図纂』を浩然著としたりする。名の「直大」が無く，他書に見えない「直久」を挙げるが，これは誤植か誤記ではないか。『南紀徳川史』は明治も半ばを過ぎてからの編集だから，誤りがあっても不思議ではない。したがって，本報ではその記載を用いなかった。

（注4）『本草綱目啓蒙図譜』は，巻8上下と巻9上下，計4冊だけが刊行された。巻8は著

名な博物画家服部雪斎が描いている。

（注５）　故上野益三先生が調べられた資料のメモ。いま私がお預かりしているが，すでに失われた分もあるらしい。

4 『教草』

近代化以前の農村手工業の実態を示す資料，『教草』（おしえぐさ）は，明治６年（1873）にオーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会の副産物として生まれた。

日本は明治４年の暮近く，開催国オーストリア（澳国）から招請を受けた。国際舞台に顔見せをする又とない機会であり，たちどころに政府は参加を決定，明治５年１月８日には太政官正院に澳国博覧会事務局を設置し，同事務局が文部省博物局（注１）と協力して準備に当たることになった。そして出品の一つとして，本邦物産を紹介する図説の作成に取りかかった。

博物局がその図説資料をもとに編集したのが，全30点・番外２点の一枚刷『教草』である。いずれもＢ３判ほどの大きさの色刷図で，諸産業の原料動植物や用具，作業などを図解し，わかりやすい解説が記されている。明治５年中に17点が完成，７年（1874）秋頃までに，第廿三を除いて刊行を完了した。これが初版である。

ところが明治８年７月，内務省が火事で焼けて，第一～第廿四が失われてしまった（注１参照）。失われた分は翌９年２月に再版したが，その際に文を修正したり，レイアウトを変えたりしたものもある。また，初版は内題に題名しか記していないが，再版は内題に「教草第一」「教草第二」……の一連番号が付されており，題そのものを多少変えたものも少なくない。この初版および再版は，いずれも影印本が出版されている（注２）が，題名がどう変えられたか明確にされていない。そこで，以下に題名変更も含め，全点の書誌的事項をまとめておきたい。題が二つ記されている場合は初版／再版の順，（　）に初版における担当者と完成時を示し，その後に注記を付した。再版で校訂・増訂者および校訂完了時が記載されている場合は，注記の末尾に記した。「述」「撰」「画」「図画」などの用語は原本どおりにした。

＊　＊　＊

一　稲米一覧（丹波（にわ）修治述・溝口月耕画，６年３月）

二　糖製一覧（安岡百樹録・中島仰山図，６年３月）：サトウキビからの製糖法。

三　養蚕手びき草／養蚕一覧（南部陳撰・宮本三平画，５年秋）

四　生糸製法一覧／生糸一覧（信夫粲撰・溝口月耕画，６年春）

五　樟虫製法一覧／樟虫一覧（信夫粲編述・菅蒼圃図画，５年冬）：樟虫（クスサン）幼虫・繭からのテグス・布の製造。

六　野蚕養法一覧／野蚕一覧（信夫粲述・菅蒼圃画，５年冬）：野蚕（ヤママユガ）繭からの糸の製造。

七　葛布一覧（鶴田清次＋佐々井半十郎撰・中島仰山画，５年冬）：葛はクズ。雨衣・袴・襖地に用いる。８年12月，鶴田清次校訂。

八　苧麻製法一覧／苧麻一覧（武田昌次述•山崎董泠画，５年秋）：苧麻（カラムシ，イラクサ科）からの織物製法。

九　草綿一覧（鶴田清次＋佐々井半十郎撰・中島仰山画，５年秋）：草綿はキワタと読み，木綿を指す。

十　製糸草木一覧／繊緯一覧（武田昌次撰・山崎董泠画，５年秋）：16品の原料植物を図示。９年春，武田昌次増訂。

十一　素麺一覧／索麪一覧（丹波修治述•溝口月耕画，５年11月）：ソウメンの作り方。９年１月，小森頼信増訂。

十二　葛・わらび・かたくり製粉一覧／葛粉一覧（丹波修治識・中島仰山画，６年３月）

十三　藍一覧（安岡百樹録・狩野良信図，５年６月）：８年12月，高鋭一校閲。

十四　青花紙一覧（山本章夫撰•溝口月耕画，６年１月）：青花紙はツユクサの栽培品種オオボウシバナの花汁で染めた紙で，色素を水で溶出して下絵を描くのに用いる。

十五　製茶一覧（加藤景孝編述・中島仰山図画，５年冬）：９年２月，山高信離校訂。

十六　烟草一覧（南部陳撰・狩野良信図画，５年冬）：烟草はタバコ。

十七　漆製法一覧／漆一覧（武田昌次撰・山崎董泠図，５年秋）：９年春，武田昌次校訂。

十八　蒔絵の教草／蒔絵一覧（加藤景孝識・狩野良信画，５年12月）：９年２月，石田為武校正。

十九　蠟製法一覧／蠟一覧（武田昌次述・山崎董泠画，５年秋）：植物蠟・蜜蠟・イボタ蠟の作り方。９年春，武田昌次再校。

二十　白柿并柿油一覧／白柿一覧（山本章夫撰・溝口月耕画，６年１月）：白柿（ツルシガキ，干柿）の作り方，柿油（シブ）の利用。

廿一　畳表一覧（山本秀夫述・溝口月耕画，６年１月）

廿二　香蕈一覧（丹波修治述・溝口月耕画，５年11月）：香蕈はシイタケ。９年１月，横川政利増訂。

廿三　製紙一覧（山本秀夫遺稿・山本正夫増補・服部雪斎図画・田中芳男校閲，９年１月）

廿四　蜜蜂一覧／蜂蜜一覧（丹波修治編撰・溝口月耕図画，５年冬）：９年春，小林常賀校訂。

廿五　油一覧（武田昌次述・服部雪斎画，７年５月）：菜種油の製法。

廿六　べに一覧（武田昌次述・服部雪斎＋山崎董泠画，５年冬）：ベニバナからの「紅」の作り方。

廿七　澱粉一覧上（鶴田清次撰・武田昌次誌・服部雪斎画，７年６月）

廿八　澱粉一覧下（武田昌次誌・服部雪斎画）：上下で澱粉の原料植物42品を図示。

廿九　褐腐一覧（榊原芳野原稿・武田昌次抄録・服部雪斎画図，７年７月）：褐腐はコンニャク。

三十　豆腐一覧（榊原芳野原稿・武田昌次抄録・服部雪斎画，７年７月）

番外　鷹狩一覧（町田久成述・菅蒼圃図，６年２月）：９年２月重修，古川躬行校（注３）。

番外　草木乾腊法（伊藤圭介原稿・久保弘道校正・服部雪斎画，８年２月）：無彩，腊葉の作り

方について日本で初めての出版という（注４）。

＊　＊　＊

『教草』は折り畳まれ，袋（書袋）に入れて販売されたが，それに３種類がある。

①書袋の表は色刷で，上部が青紫，中央は白く，下部が緑色，紋様化された鳥と蝶が数ヵ所に見られる。中央の枠内に題名だけ記し，一連番号を欠く。また，②③と違って，袋の表の文と裏の目録は無い。この袋は，当時未刊だった第廿三を除き，初版の「稲米一覧」（第一）から「蜜蜂一覧」（第廿四）までと「鷹狩一覧」（番外）に使用されたらしい。

②無彩で，表の中央枠内の題名は「教草／第廿五　油一覧」のように一連番号が入る。枠外には『教草』出版の目的が記されており，末尾は「明治七年九月　博覧会事務局」。裏には，碁盤目のなかに「第一　稲米」「第二　糖製」……と30点の目録が刷られている。ただし，第廿三の題名の個所は墨板で潰してあり，この時点で未刊だったとわかる。この袋は，初版段階の第廿五以降に用いられている。

③無彩で表の題名が番号付の点は②と同じだが，文は，末尾に「明治九年二月　田中芳男記」とあるものに換わっている。この文の前半に『教草』出版の意義を記すのは②と大同小異だが，後半は「明治六年澳国博覧会出品の際に乗じ，各種職業の教草を編成せしめ，画図を加へ、以て童蒙に便せり。然に旧版第一より第廿四まで昨八年七月の火災に罹りしにより，今之を再刻し，兼て従前の誤謬を正し遺漏を補はしむ……」と，本書出版の由来と火災による再版の件に触れている。裏は②と同じ碁盤目式目録だが，「第廿三　製紙」が入って，30点すべてが表示されている。この袋は，再版の第一～第廿四はもちろん，第廿五～第三十の後刷にも用いられている。

＊　＊　＊

『教草』の刊行を提唱，監修したのは博物局を主導していた田中芳男だった。執筆者・校訂者・画家も，石田為武・久保弘道・小林常賀・小森頼信・信夫粲・菅蒼圃・武田昌次・鶴田清次・中島仰山・服部雪斎・古川躬行・町田久成（博物局長）・山高信離・山本正夫・横川政利は博物局，丹波修治・佐々井半十郎・狩野良信は博覧会事務局に属していた。田中芳男や服部雪斎，丹波修治，山本兄弟（山本秀夫・章夫・正夫は，京都の本草家山本亡羊の五男・六男・七男）など，幕末期に活躍した博物家・博物画家が目立つ。各人の詳細は注２文献の吉田解説に譲るが，経歴がわからない人もまた少なくない。

（注１）　この博物局が現東京国立博物館につながるのだが，明治初期には所属が目まぐるしく変わった。そもそもは，明治３年（1870）９月に大学南校（のちの東大）に物産局が置かれ，田中芳男が出仕した時に始まる。翌４年９月25日，南校物産局は新設の文部省に移ってその博物局となるが，６年３月19日には澳国博覧会事務局に合併される。ついで，８年３月30日，博覧会事務局は博物館と改称され，内務省の所属となる。そして９年４

月17日，行政組織上の博物館は再び博物局に改められた（「博物館」の名称は博物局の施設名として残る）。ついで，明治14年４月７日，博物局は農商務省の所管に変わる。その後も所轄と名称の変遷が繰り返されるが，ここでは省略する。

（注２）　吉田光邦監修・解説，『教草』，つかさ書房，1980年：初版のカラー影印で，番外は「鷹狩一覧」（初版）のみ所収。樋口秀雄監修／樋口秀雄解説・大場佐一解題，『教草』，恒和出版，1977年：再版のモノクロ影印，番外は「鷹狩一覧」初版・再版および「草木乾腊法」を所収。吉田解説は執筆者と画家の経歴に詳しく，樋口解説と大場解題は『教草』作成までの経緯や編集上の問題点を取り上げる。

（注３）「鷹狩一覧」にも初版と再版が存在するので，初版は明治８年７月に焼失したと思われる。再版は，初版の文を全面的に修正し，レイアウトも大きく変えている。

（注４）　上野益三著『年表日本博物学史』は，「草木移植心得」（吉田健作録，９年11月，草木の輸送法）と「養魚法一覧」（金田帰逸著，12年）も番外編として挙げる。しかし，両者とも勧農局の出版なので，『教草』に含めるのは妥当ではないと思う。

5　『愛禽徒然草』

瑞翁著『愛禽徒然草』という筆写本がある。国会図書館の所蔵本（211-239，１冊）で，『国書総目録』にはこの一本だけが収録されている。

内容は養禽書で，正徳元年（1711）の年記があり，総合的な養禽書としては，前年の宝永７年に刊行された『喚子鳥』に次いで古い点が注目される。しかし，白井光太郎と平野四郎が書名を挙げている（注１）以外には，従来の江戸博物誌史で報告されていないと思うので，ここで概要を紹介しておきたい。

大きさは縦24.0×横17.0cm，１冊，全45丁。用箋は「大野屋惣八」の名入り９行罫紙で，名古屋の有名な貸本屋大惣が貸本用に写させたものとわかるが，書写年代は不明。構成は，序・目録・本文・後書の順で，平仮名交り文。図は無い。最後に年記・筆者名がある。

［前文］：初めに「愛禽徒然草」の題がある。11丁と長いが，籠で鳥を飼うのは可哀想だとの批判に対する反論と，鳥にまつわる故事をいろいろ挙げるだけで，中身は乏しい。

［本文］：内題や著者名は無い。以下，各節ごとに，見出しと要点を記す。

①「凡餌之方」：上餌（米と糠）・下餌（魚粉用の魚）・青味（菜）の説明。この３者を混ぜて餌を作る。

②「餌拵の伝」：細かい注意，６項。

③「諸鳥飼付養術」：捕えた鳥を餌付ける要点，ならびに鶯・駒鳥・石見駒（石見産駒鳥？）・雲雀・鶉・小瑠璃（ルリ）・小燕（ムギマキか）・郭公（ホトトギス）・鷦鷯（ミソサザイ）の飼育についての各論，計10項。

④「諸鳥常の養術」：水の与え方，とまり木の事，水浴び，爪の切り方，庭籠の作り方など，飼育に関する注意，10項。

⑤「病鳥等の養術」：病気や怪我の手当，19項。

⑥「鳥老若見分の伝」：若鳥と老鳥の見分け方，１項。

⑦「巣鳥の伝」：産卵の手法。雉・白鷴（ハッカン）・鴛鴦（オシドリ）・嶋鶉（シマヒヨドリ）・渡り鳩（海外産の鳩）の５項。キジ科のハッカンも，ヒヨドリ科のシマヒヨドリも東南アジアから中国南部に産する鳥だが，このような種類も産卵させ，雛を育てられるようになっていたことがわかる。

⑧「つみゑ并虫の伝」：餌に用いる「つみゑ」（穀類・豆）と虫の種類。

⑨「虫・けら貯様の伝」：エビヅルの虫（ブドウスカシバ幼虫）とケラを，冬場にも使えるようにしておく方法。

⑩「雑部」：形状や声の良否，雌雄の見分けなど，雑多な話題。外来の鳩として，しやむろ鳩・孔雀鳩・尺八鳩・長生鳩・金鳩・南京鳩の名を挙げ，「しやむろ鳩と南京鳩は最近途絶えているが，孔雀鳩は近年初めて持渡られた」旨が記されている。また，尺八鳩は南西諸島・台湾・フィリピンに棲むズアカアオバトとされている（注２）が，本書には「素人は騙されているが，武州の鳥屋が高値で売っている尺八鳩は，じつは美濃・信濃・飛驒の深山に棲む青鳩」とある。アオバトは，日本・台湾・インドネシアに生息する。

［後書］前文と同じく，内容は乏しい。ただ，最後に「私自身がもっとも好むのは鶉だが，この鳥はほかの鳥と飼い方が異なるので，本書に詳細は記さなかった。百瀬丹助の著作（注３）で充分だろう」と具体的な話に及ぶ。稿末に「正徳元辛卯稔仲秋吉旦　瑞翁撰」という年記・筆者名がある。

以上からわかるように，本書は一般的な鳥の飼い方の大筋を記した養禽書である。冒頭でも触れたが，この本が書かれる１年前，宝永７年（1710）に蘇生堂著『喚子鳥（よぶこどり）』が大坂で出版されており，これは鳥類全般を対象とする養禽書として最初の刊本であった（注４）。同書は計121品の和鳥の形状・生態と，それぞれの餌の組成を記したもので，形状などの叙述は参考になるが，大きな欠点があった。第一に，肝心の飼育法総論が手薄である。目録には全14節が記されているが，本文にあるのはそのうちの最初の２節，「諸鳥餌飼こしらへようの事」と「小鳥煩ふに妙薬の事」だけ。つまり，餌の作り方と病気の手当しかなく，水の与え方や，とまり木のこと，卵の産ませ方など，飼育に必要な部分が欠けているのである。第二に，外国産禽類がいろいろ持ち込まれているのに，それには一切触れていない。

このような点を考えると，『愛禽徒然草』は取り上げている和鳥の数こそ少ないが，養禽書としては目配りが行き届いているし，海外産の鳥にも筆が及び，『喚子鳥』より優れていると思える。しかし，『国書総目録』に本書しか記載が無いことが示すように，『愛禽徒然草』は写本として広まらずに終わったらしい。ほかの禽類書でも，『愛禽徒然草』の文の引用を見た記憶が無い。当時も，あまり知られていなかった著作のように思われる。

残念なことに，著者瑞翁の詳細を知る手掛かりも無く，何処の人かも不明である（注５）。何か御存じの方は，是非お教えいただきたい。

（注１）　白井光太郎，鳥に関する古書に就て，かひどり（鳥の会），2 (7)，23-30，1931年。

平野四郎，蔵書雑俎，野鳥，7（8），38-47，1940年。［白井は現国会図書館本について，鳥名の一部を記している。平野は自己の蔵書の一つとして名を挙げているが，内容には触れない］

（注２）　菅原浩・柿沢亮三編著，『図説　日本鳥名由来辞典』，柏書房，1993年。

（注３）　百瀬丹助の著作というのは，慶安２年（1649）刊の『鶉書』か，その草稿らしい『鶉目利問答書』（別名，鶉ころも）であろう。後者の一本（国会図書館，特1-2469）の末尾に「江戸本郷二町目　鳥屋百瀬丹助」とあって，この丹助が著者の可能性が高いからである。もっとも，白井光太郎は『鶉書』の著者を「蘇生堂主人」とするが，『鶉書』『鶉目利問答書』両書には，その根拠を見出せない。また，蘇生堂主人著『喚子鳥』は宝永７年（1710）の出版で，『鶉書』はそれよりも60年も前の刊行。どう考えても，同一人物の著作とは思えない。

（注４）　磯野直秀，江戸時代の禽類図譜と養禽書，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，11号，9-38，1992年。

（注５）　尺八鳩の項ほか１項に「武州の鳥屋」という字句が出るが，たまたま江戸に出たときの見聞かも知れず，江戸の住人という証拠にはならない。

6　奥倉辰行の『水族写真　鯛部』

幕末の江戸神田多町で青物商を営んでいた奥倉辰行は，幼少時から絵が旨かった。高名な国学者狩谷棭斎（1775～1835）が辰行の才能を知り，その助言で辰行は魚類の絵に集中するようになって，『水族四帖』や『魚仙水族写真』などの魚譜を作成，やがて豪華な彩色図説『水族写真　鯛部』を出版した。しかし，そのための多大な出費で家業が傾き，鯛部に続く続編の刊行が出来ないまま，辰行は安政６年（1859）８月12日に没した（注１）。辰行は名，通称甲賀屋長右衛門，字子園，号魚仙。生年未詳。

その『水族写真　鯛部』は図譜部と説部に分かれているが，ともに安政４年（1857）の出版と言われていた。ところが，松井魁は定説に疑いをもち，刊本20数点を調査して，図譜部には安政２年・安政３年・安政４年の３種の刊本があること，説部は安政４年刊だが，それにも３種類が区別されることを明らかにした（注２）。

しかし，松井報文では，資料一覧表に誤植か松井の思い違いと思われる個所が幾つかあり，また，図譜部刊本の３種類と説部刊本の３種類の対応は明確にされていない。そこで今回，改めて国会図書館本を中心に調べた結果を表２にまとめ，以下に概要を報告しておきたい。

【図譜部】

ＡＢＣの３種類がある。すべて題箋題「水族写真　鯛部」を持ち，「奥倉辰行編集／水族写真／東都　水生堂蔵板」（水生堂は辰行の堂号か）と記した見返しがあるが，自家出版で刊記は無く，以下の刊年はいずれも序あるいは凡例からの推定である。

●Ａ本（安政２年刊；例，表2―①）――２冊本。上巻は序・凡例・目録・図譜１～16丁，下巻は図譜17～37丁。序は森立之（注３），日付は「安政乙卯［２年］三月」である（表の○）。つ

表2　奥倉魚仙著『水族写真』の構成

国会図書館本	①	②	③	④	⑤
請求記号	特7-151	特7-150	特7-152	午-53	特1-912
総冊数	3冊	2冊	2冊	2冊	2冊
図と説の組み合わせ*	A＋a	Bのみ	C＋c	C＋c	C＋b
【図譜部】					
冊数	2冊	2冊	1冊	1冊	1冊
刷題箋の巻表示（冊1）	巻之一上	巻之一上	巻之一上	巻之一上	巻之一上
（冊2）	巻之一下	巻之一下			
序　森（安政2）	○	ナシ	○	○	○
曲直瀬（安政3）	ナシ	●	●	●	●
凡例　安政2年・片仮名	△	△	△	△	△
安政4年・平仮名	ナシ	ナシ	▲	▲	▲
目録**	片仮名	片仮名	平仮名	平仮名	平仮名
図の番号の有無	無	無	有	有	有
色刷図の色彩	良好	良好	派手	派手	派手
跋　多紀（安政2）	ナシ	◎	ナシ	ナシ	ナシ
刊年（推定）／タイプ	安政2／A	安政3／B	安政4／C	安政4／C	安政4／C
【説部】					
冊数	1冊	欠	1冊	1冊	1冊
刷題箋の巻表示	説		巻之一下	巻之一下	説
序　森（安政2）	ナシ		ナシ	ナシ	○
曲直瀬（安政3）	●		ナシ	ナシ	ナシ
凡例　安政2年・片仮名	ナシ		ナシ	ナシ	ナシ
安政4年・平仮名	▲		ナシ	ナシ	▲
目録**	平仮名		目録ナシ	目録ナシ	平仮名
跋　多紀（安政2）	◎		◎	◎	ナシ
刊年（推定）／タイプ	安政4／a		安政4／c	安政4／c	安政4／b

* このほか，東博本（和2359，3冊）はA＋a，同（と7538，2冊）はC＋c，東大本（T86-123，3冊）はB＋a，同（T86-173，2冊）はAのみ，国会本（121-163，1冊）はaのみ，の構成。

** 平仮名の目録には「一」「二」……の番号が付されているが，片仮名のものには番号が無い。

いで，辰行が片仮名交り文で記した「乙卯春日」の凡例（△）と，魚の和名を片仮名書きにした目録がある。この目録は魚名に一連番号を付しておらず，また図譜は90図なのに，87品しか記されていない不完全なものである。次が図譜部だが，内題は無い。図はすべて色刷で，みな落ち着いた良い色彩である。図には和名とその出典だけを記し，注釈は後述の「説部」に譲っている。なお，A本では魚図に一連番号を付していない。跋文は無い。

●B本（安政3年刊；表2—②）——2冊本。A本にあった森の序は無く，曲直瀬（まなせ）養安院正貞（注4）の「安政丙辰［3年］正月」付の序（●）に置き換えられている。それに続く凡例・目録・図譜部はA本と同じ。色刷図の色彩も，同じく良好である。下巻の最後に多紀元堅（注5）

の「乙卯竹酔日」，すなわち安政２年５月13日付の跋文（◎）が加わっている。森の序を曲直瀬序に置きかえた理由は不明。

●Ｃ本（安政４年刊；表２―③～⑤）――１冊本。序から図譜の末尾までを所収。森・曲直瀬の両序があり，ついでＡＢ本と同じ安政２年凡例とともに，「安政四年丁巳夏月」に平仮名交り文で記された別内容の凡例（▲）がある。目録は，魚名が平仮名で記されていること，魚名に一連番号が付されていること，図譜と同数の90品を記した完全なものであることの３点で，ＡＢ本の片仮名目録と異なる。図譜部は，目録に対応して魚図に番号が付されている。色刷の色彩はかなり派手で，ＡＢ本と異なった印象を受ける。また，Ｂ本の多紀の跋は無い。

【説部】

ａｂｃの３種類があり，すべて安政４年刊と考えられる。題箋題は「水族写真　鯛部」，説部冒頭の内題は「水族写真説」。したがって，図譜部を欠く資料では，「水族写真説」の題名で登録されていることが多い。説部本文は図譜部にある鯛90種類（注６）の解説で，方言・漢名・漁期・形状・産地・味などを記す。刊記は無い。

●ａ本（安政４年刊；表2―①）――題箋は「水族写真　鯛部／説」で，「説」が巻表示に当たる。曲直瀬序・安政４年の平仮名凡例・一連番号がついた平仮名目録・説部の順で，最後に多紀の跋が付く。

●ｂ本（安政４年刊；表２―⑤）――題箋の巻表示は「説」で，ａ本と同じ。森序・安政４年の平仮名凡例・一連番号がついた平仮名目録・説部の順で，多紀の跋は無い。下線部がａ本と違う個所。

●ｃ本（安政４年刊；表２―③④）――題箋は「水族写真　鯛部／巻之一下」で，巻表示は「巻之一下」。序・凡例・目録は存在せず，説部と多紀の跋だけで構成されている。

このように説部にも３種類あるのは，図譜部Ａ本を配布した人には説部ａ本を，図譜部Ｂ本を配布した人には説部ｂ本を配り，図譜部Ｃ本は説部ｃ本と組で渡し，いずれも図譜部＋説部で２種の序・２種の凡例・跋（表２の記号で○●△▲◎）と平仮名目録（完全な目録）が揃うように配慮したからだろうと思われる。表２―①のＡ＋ａ，③④のＣ＋ｃの組み合わせがその例である（注７）。もっとも，表2－⑤のＣ＋ｂ，東大本 T86-173のＢ＋ａという不揃いな組み合わせもある。これは，図譜部か説部かの一方だけを所持していた人が，後年になって説部あるいは図譜部を入手して１組に揃えたからか，古書店の所為だろう。

背後の事情はわからないが，『水族写真』は上記のように複雑な構成をもつ本であり，調査あるいは展示にあたっては，構成に注意して資料を選ぶ必要がある。魚類の彩色図譜としては，色彩の点から図譜部Ａ本またはＢ本がＣ本より格段に優れていると思われる。

（注１）　斎藤月岑，『［増訂］武江年表』，東洋文庫版，平凡社，1968年。

（注２）　松井魁，水族写真と著者奥倉辰行（魚仙）の生涯とその業績，宇部短期大学学術報告，19号，29-36，1983年。

（注３）　森立之（1807～1885）は福山藩医で，江戸在住。立之（たつゆき）は名，通称養竹，

号枳園ほか。狩谷棭斎に国学を学んだので，その関係から奥倉辰行と知りあったと思われる。辰行の蔵書は，没後に立之の手に渡り，その一部を立之は自著のように改変している。→磯野直秀，日本博物学史覚え書（II），慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，16号，40-63，1994年。［該当個所は第3節］

（注4） 曲直瀬正貞（1809～1858）は医の名門養安院曲直瀬家の人，幕医。辰行との関係は明確ではないが，医師の森立之か多紀元堅を介して交流があったのか。

（注5） 多紀元堅（1795～1857）は幕府の奥医師で，法印（楽真院）。医学館教授でもあった。元堅（もとかた）は名。漢籍古典の研究で狩谷棭斎と親しく，その関係から辰行と知りあったのだろう。

（注6） 本書は「鯛」の名がつく魚を広く集めたので，「タヒムコゲンパチ」（鯛婿源八，マツカサウオ），「マンボウダヒ」（モンガラカワハギ），「カンザシダヒ」（イトヒキアジ）なども含まれている。

（注7） 注2文献によれば，東京水産大学本がB＋bらしい。

7 『信筆鳩識』と『十新考』

富山藩主前田利保（号，自知春館，万香亭）は多数の博物書・本草書を著述したが，内容や構成がはっきりしない著作も少なくない。表題の2件もその口だが，両者が深く関わることと内容の概略がわかったので，次の3資料をもとにして報告する。なお，『信筆鳩識』の「鳩」は集めるという意味である。

(1)『十新考』，東京国立博物館本（和91，1冊）

4冊の合冊。どの冊も，題名以外の字は金属活字で印刷されている。以下，各冊の構成・内容を述べる。

①冊1：表紙の左上部に題箋風飾枠と書名が木版で刷られている。その枠内の上部に「天保十五甲辰年」（＝弘化元年，1844），ついで中央に大きく「信筆鳩識」，その下に小さく「十新考」とある。巻表示は無いが，(2)-①によれば初編である。

序文は無く，目次・本文・図の3部構成。目次には，10品の草の和名が記されている（注1）。続いて本文で，内題は「十新考　自知春館撰」。10品それぞれに漢書を引用するだけで，自己の見解などは述べない。最後が10品の図だが，いずれも植物の全体図で，拡大図は無い。手書きの写実的な線画で，無彩。品名は記されていない。

②冊2：表紙の左上に「十新考」と刷られ，下に「二編」と活字で印字されている。①とまったく同じ目次・本文・図の構成で，草10品が扱われている。「信筆鳩識」の書名は何処にも無い。

③冊3：表紙の様式は②と同じで，表紙に「十新考」と刷られ，下に「三編」と印字されている。①②と同じく，草10品が扱われているが，目次と本文だけで，図が無い。「信筆鳩識」の書名は何処にも無い。

④冊4：表紙も内題も無く，題名はわからない。自知春館主人の序（年記は無い）と，草4品

の図だけから成る。図は銅版画で，全体図のほかに，根や，オシベ・メシベの拡大図，花の分解図などを添える。注記は無い。「十新考」とは様式が異なり，別の著作と思われる。

(2)『十新考』，杏雨書屋本（杏5324，2冊）

2冊とも，表紙に題箋が貼付されている。題箋は四周双辺の枠内に「十新考」と刷られ，その下に第1冊は「初編二編」，第2冊は「三編」と記されている。東博本の文字は活字印刷で，図は無彩の線画だが，杏雨本の文字は，題箋の「三編」が活字らしいほかは，すべて筆書き，図はすべて着彩。

①冊1：東博本の①と②を併せた計20品が一括して扱われているが，目次も本文も無く，彩色図だけである。図には品名が添えられている。

②冊2：これは東博本の③と同じ10品を扱い，目次・本文・図の3部構成である。東博本は図を欠くが，杏雨本は図も揃っていて，しかも彩色されている。

(3)『信筆鳩識』，杏雨書屋本（研862，11冊）

すべて表紙は同じで，同一様式の題箋が貼付されている。題箋は紐模様の枠で囲まれ，最上部に年記を記した朱印を捺し，ついで「信筆鳩識」の題名が木版で刷られている。その下に副題が墨書され，最下部に「全」または「完」の文字が金属活字で印字されている。表紙の右肩に「万香文庫」という紫色の方印が捺印されているので，前田利保の手択本である。

この11冊は弘化4年（1847）と翌嘉永元年（1848）の成立で，うち8冊が採集記録である。もっとも採集品のリストは無く，主要な品を写実的な彩色草木図で示すに留まる。各図には，漢名，採集地のほか，多少の注記を記す場合もある。なお，採集は利保自身が出掛けたのではなく，家臣を派遣している。寺社に立ち寄ったときは，その由来なども前文で述べる。

巻次の記載はないので，杏雨書屋の付した枝番号順にまとめた。それぞれ，題箋の「年記／副題」，丁数，内容の概略（採集地，採集日，図数など）を記しておく。

①「弘化四丁未年／川口採薬」：13丁，赤羽山八幡宮・川口善光寺・慈林寺薬師如来・安行百観音，弘化4年11月22日以前，草9品。善光寺と薬師如来の刷物も綴じ込む。

②「弘化四丁未年／池上採薬」：5丁，池上本門寺，弘化4年11月5日，草7品。

③「弘化五戊申年／渋谷広尾採薬」：7丁，渋谷・広尾など，嘉永元年2月5日，草10品。

④「嘉永元戊申年／入間郡田無村採薬」：7丁，武州入間郡田無村近辺，嘉永元年4月28日，草12品。

⑤「弘化五戊申年／本草啓発　一」：37丁，内題は『本草綱目啓発』。甘草・黄耆・人参の3品に関する諸漢書の記載を列記し，利保の注記を付する。図もある。

⑥「嘉永元戊申年／蛎殻山・豊島採薬」：7丁，駒込伝中・中里・蛎殻山・船方十二天・獅子浜・沼田氷川社・豊島，嘉永元年3月28日，草12品。

⑦「嘉永元戊申年／池袋・上新田採薬」：7丁，巣鴨・池袋・板橋・平尾・上新田，嘉永元年3月11日，草12品。

⑧「嘉永元戊申年／西新井採薬」：17丁，野新田・西新井，嘉永元年4月7日，草12品。西新井総持寺の縁起を記した小冊子が綴じ込まれている。

⑨「嘉永元戊申年／［副題欠］」：56丁，内題は「分節花譜」。草54品について，漢名を見出しとし，和名・蛮名・形状・生態，ならびに富山での所在を記したもの。図は無い。

⑩「嘉永元戊申年／消日録」：50丁，博物誌的話題の覚え書。日を追って記載されており，5月19日から8月22日まで。

⑪「嘉永元戊申年／野火留採薬」：22丁，武蔵国野火留（のびどめ）平林寺，嘉永元年4月12日，草40品。序文によると，このときは利保自身も出掛けたように思われる。

*　　*　　*

以上のように，『信筆鳩識』は弘化元年（1844）から嘉永元年（1848）にかけて記された雑多な小編から成るが，一応3つのグループに分けられる。

第一は「十新考」で，各編10品ずつの草類図説。初編が天保15年（＝弘化元年）に作られ，二・三編も同時か直後の成立であろう。四編以降の存否は不明。

第二は採集記録で，杏雨書屋本(3)の8点。弘化4年（1847）11月から翌嘉永元年4月までの半年間に限られ，採集地は江戸近郊である。

第三はその他で，「本草啓発」「分節花譜」「消日録」の3点。いずれも，「十新考」式に巻を重ねる予定だったかもしれない。

この3グループに共通する性格ははっきりせず，単に博物誌関係の小記録を寄せ集めたという感がする。しかも，その小記録は，どれも中途半端に終わっている。博物誌資料としては，上記第二の採集記録が目にとまるが，せっかく江戸近郊の諸方を訪ねながら，採集品のリストが無い。40点を図示した野火留を除いて，自然の記録としては価値が低い。

「十新考」にしても，注記は一二の漢書を引くだけに終わっている。オニノヤガラやショウキランのように従来あまり取り上げられなかった植物や，オジギソウ・紅毛カタバミ・キンネムなどの新しい渡来品が多いのに，自身の観察による記述や，移入の経緯などをまったく記さない。

『信筆鳩識』と『十新考』は，福井久蔵が『諸大名の学術と文芸の研究』（厚生閣，1937年）のなかで名を挙げて以来，書名だけはよく知られているが，どうみても価値が高いとは言いがたい資料である。

（注1）　各編所収の草名は次のとおり。いずれも原本の表記による。［　］は現和名。――初編：クサフジ，イブキワウギ，立山一花地参，サミダレキキヤウ，紋桔梗，アヲテンマ［オニノヤガラ］，ランテンマ［ショウキラン］，ネムリグサ［オジギソウ］，オランダヒルガホ，ハルシヤギク。二編：オサグサ，ミヅヒキ遠志，キキヤウラン，ゴゼンタチバナ，ツルワタ，梅花ギク，岩キリン，蝦夷ビジンサウ，紅毛カタバミ，松葉ヨモギ。三編：ハシヤウガ，セリヤーアン，ユリスイセン，ハリゼリ，キンネブ［キンネム］，丁子ギク，一葉ヨモギ，キンチヤクナス，タキワキサウ，一茎トケンラン。

8 『日新会図』と『奇草小図』

前節で，博物大名として知られる富山侯前田利保の著作を取り上げた。その利保の論述ではないが，利保と縁が深い図譜に『日新会図』がある。最近，この図譜が藤沢光周（みつかね）著の刊本『奇草小図』と密接な関係をもつことを知ったので，その大要を記しておきたい。

前田利保は弘化３年（1846）10月18日，幕府に隠居を願い出て許された。その後２年ほど江戸に留まっていたが，嘉永元年（1848）９月，江戸を去って富山に帰国した（注１）。江戸での利保は多くの博物家・本草家と交流があった（注２）が，富山はそのような環境ではない。そこで，博物誌への関心を育てようとしたのだろうか，いつの頃からか利保は「日新会」という組織を作った。これは草木品評会で，毎回草木の愛好者に鉢植などを出品させ，それを全員で評価して，優品の出品者には褒賞を与えた。牧野富太郎は，その一例として嘉永５年（1852）１月23日の会合の品評表を紹介している（注３）。このときは17名が集まり，17品を品評して，「絶品」「奇品」「上品」「凡品」などの判定を下した。また，別に，同じ性格の「物品分種会」なる会もあった（注４）。利保は，これらの会がやがて博物誌的な会に発展し，博物家が育つのを期待したのだろう。

その日新会の記録が『日新会図』であるが，現在は国会図書館蔵の『日新会図 第二』（特1-2698，１冊）しか知られていない（注５）。これは序・跋・凡例が無く，目録と図譜部だけから成る。図は彩色されており，品名だけを添え，注記は無い。所収数は計101品。最後に「嘉永六癸丑仲秋，高野写」との奥書がある。

目録は日新会の集会日別になっている。年次は記載されていないが，奥書にある嘉永６年（1853）であろう。その月日と品数を次に示すと――

１月14日　16品	２月15日　15品	３月16日　16品	４月15日　15品
５月14日　17品	６月14日　15品*	７月21日　７品	［計101品］

*目録は16品だが，誤記が１点あるので，15品とした。

これから，会合は毎月１回，15日前後に開かれたことが明らかである。図には「絶」「奇」「上」などの文字を記入したものがあるが，これは上述した嘉永５年の会の「絶品」「奇品」「上品」を意味すると思われるので，品評が行なわれたことが明らかである。そこで，数年前に本資料を初めて閲覧したときは，牧野富太郎が紹介した上例のように，毎回の会合に10数名が参集し，一人１品ずつを出して競ったのだと解釈していた。ところが，それは違っていた。

先頃，必要があって刊本『奇草小図』（国会図書館，67-217，３冊）を閲覧した。著者は富山藩士の藤沢音人光周，高山植物中心の草類252品の彩色図譜だが，図だけで注記は無い。刊記は無く，序の年記から安政元年（1854）の刊行とされる。本書については上野が大要を紹介し，最近正橋が全品の目録を作っている（注６）ので，詳細はそれに譲る。

さて，『奇草小図』を手にした２日後，たまたま『日新会図　第二』を見た。そのとき，見覚えのある図が幾つか存在することに気付いた。それが最近目にしたばかりの『奇草小図』の図だったと思い出し，すぐ請求してみると，まさにその通り。しかも，共通する図は１点や２点ではなく，かなりの数に達しそうだった（注７）。

改めて翌日，本腰を入れて両者を比較してみたところ，想像もしていなかった結果となった。『日新会図　第二』に所収されている101図のうち，1品以外は『奇草小図』中の図とみな瓜二つ，つまり構図までそっくりだったのである。ただし，図の順序はまったく違っている。

『日新会図』は国会図書館の「第二」しか知られていない。しかし，京都の本草家山本榕室が『日新会図』所収品の名称の正誤を検討した『日新会図目録』と題する資料がある（注8）。この資料は，『日新会図』の巻次も会の開催日も記しておらず，図も無く，ただ品名を列記して，自己の見解を記すだけである。その『日新会図目録』の内容は調べていなかったが，所収品数が204点ということだけは記録してあった。この数は『日新会図　第二』のほぼ倍なので，所在不明の分の手掛かりが得られるかもしれない。そこで改めて検討してみると，その後半の101品が『日新会図　第二』に相当することがわかった。

そうなると，前半が『日新会図　第一』に当たると考えてもいいだろう。その分も『奇草小図』と重なる個所があるのではないか。そう思って『日新会図目録』の品名を『奇草小図』の品名と比べてみると，やはり『日新会図目録』前半部103品のうち102品の名が『奇草小図』中の名と一致した。つまり，『日新会図』は「第一」「第二」を通じた204品中203品までが『奇草小図』の品と同一なのである。

『日新会図　第二』は嘉永6年（1853）前半の日新会7回分の記録である。『日新会図目録』には会合日が記録されていないが，記載品数から推定して『日新会図　第一』もほぼ同じ回数分の記録とみれば，「第一」は嘉永5年（1852）後半の記録にちがいない。したがって，日新会の進め方は，嘉永5年の後半から大きく変わったらしい。牧野の紹介例のように，嘉永5年の初めには10数人がそれぞれ1品の鉢植えなどを持ち寄って，その優劣を競っていた。それが，毎回藤沢光周の独壇場になって，やがて安政元年（1854）に刊行する『奇草小図』の原図あるいは試し刷10数点ずつを持ち込んでいたことになる（注9）。先に述べたように図についての品評は一応行なわれていたようだが，この度は褒賞が目的だったとは考えられない。絵図に描かれている草類を検討したり，論じあうのが主目的であったと思う。

日新会は前田利保が主導していた。『奇草小図』の刊行も，利保が後に控えての出版であった（注10）。日新会の進め方を一変し，光周に毎回『奇草小図』の原図類を持参させたのは，間違いなく利保の意志によるものだろう。利保は，日新会を単なる品評会から脱皮させて，動植物の検討会へ歩みださせようとしたのだと思う。しかし，果して事が思い通りに運んだであろうか。

（注1）　富山市郷土博物館編，図録『お殿さまの博物図鑑：富山藩主前田利保と本草学』，富山市教育委員会，1998年。

（注2）　平野満，天保期の本草研究会「赭鞭会」，駿台史学，98号，1-47，1996年／前田利保と本草学，注1文献，3-5。

（注3）　牧野富太郎，万香亭日新会草木品評表ノ一，植物研究雑誌，5(4)，口絵，1928年。

（注4）　牧野富太郎，蓋シ嘉永年間ニ富山藩主万香亭前田利保侯ノ催サレタ物品分種会ノ草木

品評表ノ一，植物研究雑誌，5(5)，口絵，1928年。

（注５）　杏雨書屋に『日新会図』（乾1601，１冊）があるが，これは後出の『日新会図目録』の写本である。→注８

（注６）　上野益三，奇草小図とその著者・同補訂，『博物学史論集』，225-243，八坂書房，1984年。正橋剛二，近世後期における本草学史上の立山について，富山県立山博物館調査研究報告書，1999年。

（注７）『日新会図』も『奇草小図』も以前に見ていたのだが，そのときは時を隔てて閲覧したので，両者に共通する図があるとは気付かなかった。

（注８）『日新会図目録』は国会図書館蔵『本草通串図証』（特1-575，１冊）に含まれている。本書は山本榕室が諸書の品名の正誤を検討した著作を集めた転写本で，『本草通串図証』『湖中産物図証校正』『日新会図目録』の３件から成る。なお，杏雨書屋蔵『日新会図目録』（杏5976，１冊）は単独の写本で，内容は国会本とまったく同一である。→注５

（注９）『日新会図』で連続する２品の図が，『奇草小図』の同一丁の表裏（オ面・ウ面）に刷られている例が『日新会図』「第一」「第二」両方で，31組・62図，全体の３割も存在する。これは，『奇草小図』の版刻が進んでいて，藤沢がその試し刷を持ち込んだことを示唆している。それ以外は，原図を持参したのであろう。

（注10）『奇草小図』には金属活字が使われている。前節で記した前田利保著『信筆鳩識』中の「十品考」は金属活字で組まれており，『奇草小図』のそれも利保が使わせたに違いない。『奇草小図』の序文には何一つ記されていないが，その出版自体が，おそらく利保の強い勧めと経済的援助によるものであろう。

9　『熊野浦鯨魚図』

数年前，「江戸時代鯨類図説考」（注１）の中で，江戸時代の鯨図譜では描かれている10種類前後の鯨の図柄がよく似たものが少なくないこと，その図柄を基にするとＡＢＣＤの４系統に分かれることを報告した（注２）。そのとき，ＡＢＣ系統が大捕鯨基地だった紀伊の熊野で作られ，Ａ系統は享保６年（1721）以前，Ｂは同８年，Ｃは同10年に描かれた図譜に由来することも明らかにした。ただ，Ｄ系統の由来は不明だったが，その後に究理堂文庫蔵『熊野浦鯨魚図』によってＤ系統の起源も推察できたので，ここで大要を記しておきたい（注３）。

この図譜は巻子本１巻で，鯨猟図・漁具図・鯨品類図の３部に分かれ，いずれも彩色されている。鯨の品類は「背美（セミ）鯨・マツコ鯨・座頭鯨・児（チゴ）鯨・長髭鯨（長須鯨）・鰹鯨・クロ（以下・イルカ類）・シヤチ（サカマタ）・無名品（マイルカ）・大食喰（おそらく大魚喰（オオウオクイ）の誤写）・ゴト」の11品で，個々の図柄は明らかにＤ系統に属している。なお，「クロ鯨・ゴト鯨・大食喰（沖ゴト）」は，Ｄ系統の図譜にしか現われない名称である。

図巻の末尾には，「右本　天明二壬寅夏　奉」の年記と，究理堂文庫本を作成した人の次の識語がある――「厳廟之命太地（たいち）頼徳写真形併画所以漁之具以上藩請其草彙於太地氏而友人々井元方臨摸以為間時之奇阮余請之摸写也。寛政六甲寅季夏　□正美」（□は読めず）。

この年記と識語から，「厳有院（＝将軍家綱，在職1651～80）の命で太地頼徳が原本の鯨図巻を描き，太地家所蔵の控を藩が借り受け，天明２年（1782）夏に人井元方に模写させた。それを正美という人物が寛政６年（1794）６月に継写した」と解せる（注４）。したがって，Ｄ系統の鯨図の起源は古く17世紀後半まで遡ることになり，天明２年よりも古い資料が存在するはずだが，いまのところ出会っていない。なお，書名から，この系統の図譜の原本も，ＡＢＣ系統のそれと同じく，熊野で作成されたことがわかる。原本を描いた太地頼徳は，おそらく熊野捕鯨基地の一つ太地村の人であろう。

この系統の写本は現在13点を確認している（注５）が，いずれも他系統の鯨図より写実的で良い図が多い。そのなかでも，大蔵永常著『除蝗録』に刻されている11品の図はとくに優れており，また『熊野浦鯨魚図』の11品とまったく同じ構成である（注６）。

（注１）　磯野直秀，江戸時代鯨類図説考，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，**16** 号，25-36，1994年。

（注２）　現在までに計82点の鯨図譜を調べたが，その内訳は，Ａ系統26点・Ｂ系統18点・Ｃ系統３点・Ｄ系統13点・その他22点である。

（注３）　究理堂文庫は，江戸時代から続く京都の医家小石家に所蔵されている。本図巻の閲覧をお許しくださった小石秀夫氏に，心から御礼を申し上げる。

（注４）　拙報「江戸時代動物図譜における転写」（山田慶児編『東アジアの本草と博物学の世界』，上巻，299-333，思文閣出版，1995年）で，Ｄ系統の原本が「天明二年に描かれた」と記したのは私の誤りなので，撤回する。

（注５）　Ｄ系統の図譜に描かれている鯨の品数は８～15点とばらつきがあるが，11点の例がもっとも多く，原本が11点だったことを示唆している。この品数の点からも，『熊野浦鯨魚図』が原本に近いことがわかる。

（注６）　江戸時代には稲の害虫の除去に鯨油を使ったので，農書に鯨の絵が登場したのである。『除蝗録』は『日本農書全集』第15巻（農山漁村文化協会，1977年）に翻刻されている。